

「地図豆」の地図を広げて街歩き

44-1 旧陸軍の遺構などをたどりながら石神井川を上る

(王子駅～王子駅 距離 4.5km)



緑の吊り橋

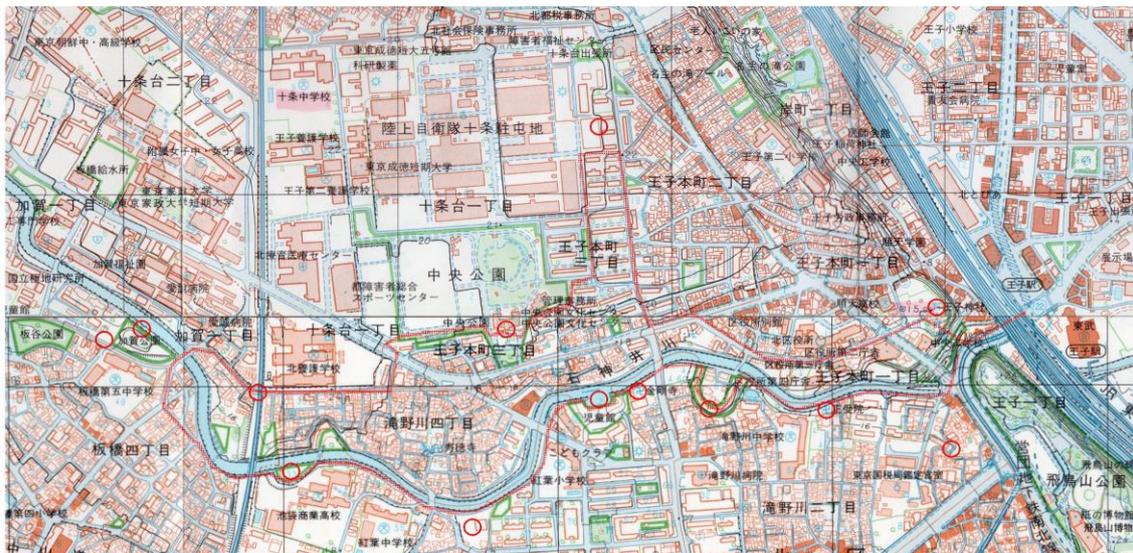
桜が終わると新緑がまぶしい石神井川を、王子駅から上流へとたどってみよう。

石神井川の北、赤羽側には、旧陸軍などの遺構が多く残るのでこれをたどることにする。そして、かつて蛇行していた石神井川は、都市化に伴い直線化が行われて、コンクリートで固められた河川になっている。蛇行跡は、緑多い公園や公共施設となって利用されているから、これも併せてたどってみる。遺構のことは、『東京の痕跡（遠藤ユウキ著）』を参考にする。

【道順】

JR 王子駅→王子神社・音無親水公園→米軍極東地図局跡・中央公園→軍用線路跡・加賀公園→石神井川蛇行跡・遊水池公園→飛鳥山公園→JR 王子駅

ルートマップ



【街歩き解説】

・王子神社・音無親水公園

末社の関神社は、全国でも珍しい「髪之祖神」。その祭神は百人一首でも有名な蟬丸公で、姉「逆髪姫」のために髷・鬘を作ったという伝説により、髷、鬘や床山業界の方々の信仰厚い神社だとか。

音無親水公園は、古くから景勝地として親しまれていた音無川（石神井川）を飛鳥山トンネルで通過したことで、残った河川敷を公園としたもの。



音無親水公園

・旧造兵廠十条工場跡と本部庁舎跡（旧米軍極東地図局跡）

北区中央公園で目につくレンガ造りの旧造兵廠十条工場跡は、現在北区中央図書館になっている。その南にある白亜の旧造兵廠本部庁舎跡は、のちの旧米軍極東地図局跡（戦後、日本とその周辺の地図作成を担当した）で、現北区中央児童文化センターとなっている。同施設東には、ドームになった赤羽台第3号古墳石室がある。

・加賀前田家下屋敷跡

西へとすすむ。JR 埼京線の脇には、コンクリート製の橋台が残っていて、これは明治 38 年の軍用線トロッコ軌道敷設時に建設された跨線橋跡だという。

石神井川を渡った先の加賀前田家下屋敷跡にも、板橋火薬製造所を通る電気軌道（軌道幅 750mm のトロッコ）の線路跡が残る。その板橋火薬製造所は、昭和 15 年に東京陸軍第二造兵廠となった。弾道検査管が石積とともに残る。

辺りは、加賀前田家下屋敷跡で平尾邸と呼ばれ、藩主と家族のための別荘として使われていたという。今は、築山の一部が加賀公園内に残るだけ。



軍用トロッコ軌道跡・板橋火薬製造所弾道検査管跡

・石神井川蛇行跡を見ながら

ここからは、現石神井川の左右に残る蛇行跡を見ながら東進する。河川改修した石神井川の蛇行跡を利用した「音無くぬぎ緑地」（右岸側）「音無こぶし緑地」（左岸側）がある。また、当時のままにすり鉢状に残して遊水機能も維持している。「音無もみじ緑地」（右岸側）もある。河岸の桜並木は有名である。



「音無もみじ緑地」・金剛寺で

・金剛寺

かつて、このあたりは音無溪谷と呼ばれて、飛鳥山の桜と並ぶ紅葉の景勝地であって、

王子七滝もあったが、現在は名主の滝だけしか存在しない。音無もみじ緑地に近い金剛寺は、滝野川城址でもある。源頼朝布陣伝承地の案内板がある。

・石神井川蛇行跡緑の吊り橋

石神井川蛇行跡を利用した「音無さくら緑地」は緑が多く、「緑の吊り橋」と名づけられた吊り橋がある。周囲を注意深く観察するとハケから水がしみ出す自然露頭を発見できるだろう。

・正受院（近藤重蔵像）から再び音無親水公園

飛鳥山公園へ正受院には、蝦夷地探検、択捉島に「大日本恵土呂府」の標柱を建てたことで知られる近藤重蔵の小さな像がある。

+ * * * + オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu + * * * +

米国極東陸軍地図局跡

(東京都北区十条台1丁目 北区立中央公園)

米軍は、日本の統治と戦後復興のためには、基盤とする地図作成が必要であることを強く認識していたと思われる。

日本本土へ進駐すると、新宿伊勢丹デパートを接收し、担当する第 64 工兵技術大隊をして精力的に地図作成を行う。

その後、1952 (昭和 27) 年 4 月、サンフランシスコ講和条約が締結されると。第 64 工兵技術大隊は、翌 28 年に北区王子の旧陸軍造兵廠跡に移り、30 年には戦時の組織は解体されるのだが、1956 年には極東米国陸軍地図局 (U. S. Army Map Service, Far East : 当初は米国陸軍極東地図局) が、第 64 工兵技術大隊を吸収した第 29 工兵技術大隊を母体として、この地で編制される。

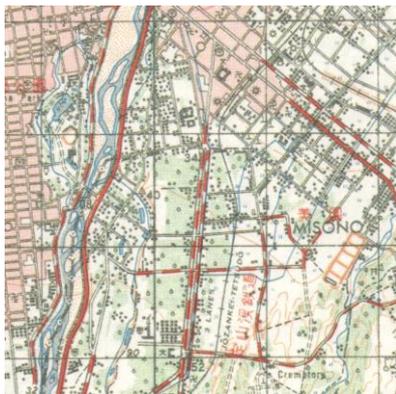
米軍による日本地域の地図作成は、戦時中はワシントンにあった AMS によって、旧陸地測量部の地形図をベースに地名をローマ字で重ね書きし、メッシュを入れたものを作成使用した。

戦後間もなくの間は、伊勢丹にあった第 64 工兵技術大隊が、終戦前後に撮影した空中写真を使用して経年変化部分の修正を行って 4 色刷の地形図を作成した。

同時に、GHQ は、日本の地理調査所に指令して、全国の基準点調査、地名調査などを行う。その後、極東米国陸軍地図局は、終戦後に撮影された空中写真と前記の地理調査所が行った調査をベースに、新たな地形図作成を行った。作成された地形図は、5 色刷りで、等深線などの海図の情報も含まれたものである。

1959 (昭和 34) 年には、日米地位協定の下で双方が使用できる 5 万分の 1 特定地形図が作成され、さらにこれを利用した日本の 5 万分の 1 地形図も作成された。この間、写真測量で作成された地図は、日本地域と東南アジア各地に及ぶものであった。

1966 年、王子キャンプの極東米国陸軍地図局はハワイに移り、地図における日本戦後はやっと終わる。



(東京) 近藤重蔵の墓と・重蔵の甲冑姿の像

(東京 近藤重蔵の墓：東京都文京区向ヶ丘 1-13-8 西善寺 都旧跡)

(重蔵の甲冑姿の像：東京都北区滝野川 2-49 正受院)



重蔵の甲冑姿の像



近藤重蔵の墓

蝦夷地を探検した人々の年代をおさらいしておく、忠敬(1745-1818)、徳内(1755-1836)、重蔵(1771-1829)、林蔵(1780-1844)、武四郎(1818-1888)の順となる。忠敬が一番年輩ではあるが、蝦夷地を目指したのは忠敬が1795年、徳内が1785年、重蔵は1798年、林蔵は1799年で、四人はほぼ同時期であった。武四郎は、40年ほど遅れて1843年である。

重蔵はその後、五回に渡って蝦夷地と千島、樺太を訪れて新道開削、航路開拓など北方経営に成果を上げ、札幌創建の意見を述べたという。博学で蔵書も多く、その後御書物奉行に栄進した。

墓は文京区にあり、墓碑の横にある説明文には、諱名(いみな)を守重といい、駒込に生まれ湯島聖堂の学問吟味に最優秀で合格したとある。

50歳になって大阪弓奉行を解任され蟄居した現在の北区滝野川の正受院には、重蔵の甲冑姿の石像がある。

平戸藩主松浦静山の残した「甲子夜話」にある、「お咎をうけて江府に還る。是も程ありて御免蒙り、郊外に居を構へ住りと聞く。然るに此処に高陵を築き、新富士と称し、山頂に、正斎、白日昇天之所と云碑を立、又山に窟を穿ち、己が甲冑の像など置きたるなど伝聞せしが…」にちなむものであろう。

晩年に子の犯した罪のために、最期を過ごした滋賀県にも墓がある。(→(高島町)近藤重蔵の墓)